

無関心層を対象としたDr.ナダレンジャーの実験教室

■ Dr. ナダレンジャーは防災教育プログラム

災害に対する関心は誰しも決して低くはないのですが、大きな災害の直後をのぞいて、暇があっても防災訓練等のイベントに参加するのは、関係者以外はそのために動員された人とごく一部の意識の高いリタイア世代の方だけではないでしょうか。

防災にとってもっとも重要な要素の一つは、継続性のある文化としての、一人一人の防災意識の底上げです。専門の研究者自身が演じる金髪、付け髭、3D眼鏡で変装した「Dr. ナダレンジャー」は性別・年齢・職業・知的レベルを問わず、災害に無関心な大多数の人を対象にした防災教育プログラムです。

■ 小さくすればおもちゃ、大きくすれば絶叫マシン

災害をひき起こす自然現象は、危険であり、こわいというのがふつうの見方です。しかし、誤解を恐れずに別の見方をすれば、安全を確保された体験者、観察者にとって、大災害を引き起こす非日常的な自然現象は絶叫マシンのような興奮と科学おもちゃのような興味を喚起する素材でもあります。したがって、自然災害現象は科学教育素材として大変有利です。



写真1 デパート屋上のピンポン球雪崩実験斜面

■ 知性ではなく感性で

対象は無関心層です。ということは演じる上で、日常的な体験以上の予備知識を必要としてはいけません。幼児でも認識できるキレと専門家でも飽きないコクが必要です。感性に響き、いつまでも感覚として腑に落ちてもらう必要があります。

■ 人が集まるところが活動の場

幼稚園から大学、成人学級まで、人数は10数人の小規模なものから5百人をはるかに超える大規模なものまでの出前授業のほか、お祭りのステージ、初詣、初午などの地域の行事、一般の科学館、デパート、スーパーなど不特定多数の人が集まるところならどこでも Dr. ナダレンジャーの教室の現場になります。これらは、特定の関心ある人だけを動員しているイベントと違い、動員しなくても大勢の人がいて効率的です。ただし、演者の実力も問われます。



写真2 固有振動によるブロック倒し実験

(防災システム研究センター 納口恭明)